

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 7 3 号

2025 年 1 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源「エペソ人への手紙講解説教」より (7)

## キリスト教は永遠の生命を教える宗教

お祈りのうちに出て来ました言葉であります、われわれはキリスト教のことを地上のことにばかり当てはめまして、自分がどうであるとか、自分の信仰がどうであるとか、自分の行ないがどうであるとか、自分がどうもなっていないと言って自分のことばかり言っていますけれども、聖書を読みますと、聖書は天のことを書いてある。そして福音というのは、われわれに、この肉体が死んでも死なない永遠の命を与えるということが書いてある。それが聖書の中心でありまして、それを福音と言う。

そのことを学ばなければ、所詮キリスト教を勉強しても意味がない。人に親切にするとか、良い行ないをするとか、あるいは安心した心持ちを持つとか、そういうことはなにもキリスト教で言っているだけではない。他の宗教でも言っている、道徳もみんなそうです。

ですから、ここへいらして聖書の講義を聞いていただいて、福音のこと、永遠の命のことはお信じにならなくてもよろしい。信仰は難しい。なかなか信じられない。信じられなくてもいいですから、キリスト教というものは、こういうことを教える宗教である、一言で言えば「永遠の生命を神様がただで与えてくださった」ということをキリスト教は教える宗教であるということだけは知っておいてもらいたい。信じなくてもよろしい。そういうことを知っておいて頂きたい。キリスト教というものはこういうものであるということ。これは感情の問題ではない。知恵の問題です。意思の問題です。

それがまた、我々の人生にいかに必要なことであるか、それがわれわれに生きる力を与えることになるということは後から分かってきたらよろしい。初めから自分の日々の人生に応用する必要はない。そういうことを、だんだん私は年取ってきてわかってきた。

イエス・キリストの十字架の贖いによって、永遠の生命を受ける

「異邦人が、福音によりキリストにあって、わたしたちと共に神の国を継ぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである」(エペソ書 3 章 6 節)

これをもっと簡単に言えば、「異邦人—未信者のわれわれ—が、キリストにあって福音により」というのは「イエス・キリストの贖いによって」ということです。「イエス・キリストの十字架の贖いによって、わたしたちは永遠の命を受けるものとなった」ということでもあります。これが、前回学んだ中心であります。これが福音であり、これがキリスト教の全部と言ってよい。われわれは、イエス・キリストの十字架の贖いによって、永遠の命を頂いたのです。

ここには「信ずる」という字がない。6 節には「信ずる」という字がないでしょう。「異邦人が、福音によりキリストにあって、わたしたちと共に神の国を継ぐ者となり、共に一つのからだとなり、共に約束にあずかる者となることである」。すなわちキリスト教の中心というものは、われわれがキリストにあって、キリストの贖いによって永遠の命を得るものとなるということです。キリスト教は、「贖いで救われる」ということです。

それを客観的に言い表したならば「贖いで救われると信ずる」と、こうなる。小西は贖いを信じて救われていると、「信ずる」という字が客観的にいう

場合は出て来る。しかし何を信ずるかという信仰の客体だけをいう場合には、「信ずる」という字は必要ない。「贖いで救われる」です。

はっきりしておいてください。ここで引っ掛かる。「信ずる」という字がありますから。わたしは信仰がありません。信仰で救われるのではない。贖いで救われる。この6節には「信仰」という字がない。これが中心です。

## キリストの無尽蔵の富

「キリストの無尽蔵の富を異邦人に宣べ伝える」と、これがすなわちパウロの恵みを受けた目的です。「キリストの無尽蔵の富」と言ったら、「贖いの広さ、深さ」を異邦人に宣べ伝えるということです。「キリストの無尽蔵の富」と言うのは「贖い」です。われわれの罪科を全て贖って、そしてわれわれに永遠の命を与えて下されたということです。これがキリストの無尽蔵の富です。これが福音です。これがパウロが宣べ伝えようとしたところです。これをパウロは詳しく、ロマ書 16 章を通じてもって説明した。一言で言えば、キリストの無尽蔵の富です。これが福音です。キリストの持ち給う無尽蔵の贖いの救いの富です。

この字が、ロマ書 10 章 12 節に出てくる。「主の名を呼び求むる者に豊かに恵み給う」、「豊かに恵む」という字がこの字です。「富」と言う字です。そうですからこの富を受けるのは、キリストの贖いをただ信ずるだけでありますけれども、信ずるということが非常に難しく、またこれを続けることが非常に難しいので、ロマ書において詳しくパウロが説明しまして、「主の名を呼び求める者に無尽蔵の富が向かっている」と書いた。そうですから無尽蔵の富を味わう、自分のものにするために「主の名を呼ぶ」ということを、ロマ書においてパウロは詳説した。

## 贖いだけで救われる

「しかし、わたしたちを愛してくださった方によって、わたしたちは、これらすべてのことに勝ち得て余りがある」(エペソ書 3 章 37 節)

信仰の客体には「信ずる」という字は要らない。入れたらいけない。ややこしくなる。ルターが「信仰だけで救われる」と訳しましたから、このことが害した。あれは「贖いだけで」と言わなければならない。自分で味わう場合には。客観的に言えば、「彼は贖いを信じて救われる」と、「贖いで救われると信じる」と。「信ずる」という字は、客観的に言う場合に必要です。主観的には必要がない。「確信をもって」というのはそこから来る。

「大胆」という字をルターは「喜び」と訳した。2, 3 言語を訳した英語でも、これは、「大胆」と訳してありますけれど、原語は「大胆」ですけど、ルターは「喜び」と訳した。ルターという人は、じきにパウロが書いたものを自分の言葉に直す。

ルターという人はよっぽどパウロの書簡を勉強した人。そうですから勉強しぬいて、口訳するというのは、パウロの言葉でない言葉を使う。「信仰で救われる」とあったら、「信仰だけで」と「だけ」という字を入れて見たり、あれはルターが入れたのです。

## 無尽蔵の富は永遠の生命

以上のところで私感じたことを、一つ二つ申し上げたい。

第 1、「キリストの無尽蔵の富」ということ。これがキリスト教の全部です。キリスト教の無尽蔵の富、キリスト教がわれわれ人類にもたらしたもうた無尽蔵の救いの富、これが福音の内容でありますし、これを宣べ伝えるのが福音を宣べ伝えることでもありますし、これを信ずる者をキリスト信者と言う。…キリスト信者というのは、この無尽蔵の富を信ずる、それを本当だと受ける者を、これをキリスト信者という。

そして信仰は、無尽蔵の富は永遠の命ですが、そんなものはわれわれは欲しくない。不幸にして、われわれはキリスト教の救いを欲しくない。これが難しいところです。そうでしょう。われわれは健康が欲しい。金が欲しい。人に褒められる、自由をしたい、そういう欲求はありますけれど、永遠の命が欲しいと言う欲しさはない。無尽蔵の富も、食欲のない者には山海の珍味も意味がない。われら普通の凡人には、永遠の命は欲しくない。無尽蔵の富は有ってもないようなものです。欲しくない。

それを味わうように、ロマ書 10 章 12 節に「主の名を呼び求むる者に対して、無尽蔵の富は向かっている」と書いてある。われわれ、信仰もない、信仰することも出来ないような落第生には、この「主の名を呼ぶ」ということが、もう命の綱です。

## パウロの謙遜

第2に感じますことは、パウロの謙遜。すなわち、最も小さいものよりもまだ小さい。英語でnothingと言いますが、nothingに対してless than nothing、何も無い者よりもまた少ない、パウロはそういう謙遜さを、自分は本当に何も無い者であるということを思っておられた。

どうもキリスト教の信仰というものは、深くなればなるほど自分が低くなるし、低くなればなるほどキリストの深い無尽蔵の富が分かるようになっているのでしょうが、パウロのこの謙遜さというものは、われわれ年と共に少しでも学びたいと思います。

それから第3に、今日の「確信」という字です。「確信をもって神に近づく」。これはさっき申しました、贖いから来る。われわれが神に近づくということは、天国に行くと言ってもよろしい。確かに天国へ行くのだという確信は、イエス・キリストの贖いから来る。他からは来ない。これはイエス・キリストの無尽蔵の富です。その富を自分に吸い取るのは、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことです。

## 一隅を照らすもの、これ国宝

私が最近感じますことは、自分一人が分かったらよろしい。人にまで分からず必要はない。自分一人が分かたらよろしい。自分というものも人類の一部分です。自分が分かるということは、また他の人も分かるという可能性がある、他の人が分かることです。自分一人が分かたら、人のことを心配することはいらぬ。

私は自分一人というものがいかに尊いものであるかということが、このごろ少し分かって来た。人にまで説教する必要はない。自分も人類の一部分です。伝教大師は、「一隅を照らすもの、これ国宝」と言った。本当に自分がイエス・キリストに照らされて、福音を分からせてもらうということは、これ国宝になることです。内村鑑三は、「一人の信者ができたら日本の国は変わる」と言った。

## 来世によってこの世のすべての苦痛が慰められる

10年前にここを講義しました時に、小沢辰男兄弟が司会してくれまして、その時に『続一日一生』の3月31日の内村先生の感想文を読みましたから、今日もこれをもって終わりたいと思います。

「来世によってこの世のすべての苦痛が慰められる。すべての不幸艱難ばかり、死そのものまでが完全に慰められる。この世限りと思うがゆえに、人生に不平が多く、耐えがたきもだえがあるのである。されども確実なる来世の希望の前に不平不満は消えて跡なしである。人は能率増進の必要を説くが、来世の希望程能率を増すものはない。口に讚美歌が絶えずして、仕事は常にはかどるのである。人の過失はたやすく許すことができるようになるのである。身の不幸は、希望の輝きの前に消散する。もし全ての人に堅き来世の希望があるならば、社会問題は直ちに消え、平和は世界に「みなぎるのである」

「平和は世界にみなぎる」で、「みなぎるであろう」という未来ではない。

(present indicative) 現在。平和は世界にみなぎるのである、と書いてある。これは内村鑑三の感想。私は全く同感です。

信仰の問題は、頭を下げて、神の前にひれ伏して聴くべき問題

われわれはうかうかと教会へ参りまして学んでおりますけれども、信仰と言うものは神の知恵でありまして、聖霊がわれわれに臨んで初めて分かることでもあります。これはいかに難しいことであるかということは、パウロがここに、信仰の教えを終わる場合に祈りをもって終わり、神への讃美をもって終わることによって分かる。われわれはうかうかと聴いておりますけれども、キリスト教の信仰というものは人間の知恵を超えている。

ですから我々は、本当に謙遜なる心をもってこれを聞く必要がある。こうべを垂れて聴く必要がある。頭を上げて聞くべき問題ではない。信仰の問題は、頭を下げて、神の前にひれ伏して聴くべき問題です。

聖霊により、力をもってあなた方の内なる人を強くして下さる

「どうか父が、その栄光の富にしたがい、御霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強くして下さるように」（エペソ書 3 章 16 節）

これが、祈りの第 1 です。1 は一番大切です。

「栄光」というのは、父が持つておられる知恵、力、愛、そういうものを皆、全部ひっくるめたものを「栄光」という。全ての、父の持つていらっしゃるその「富」、「富」というのは人に与えるのに適当な言葉です。父の持ちたまう無限の富にしたがって、「御霊により、聖霊により、力をもってあなた方の内なる人を強くして下さる」。これがキリスト教の全部です。「内なる人を強く」、一言で言えば「聖霊の力を給う」ということです。「信者に聖霊の力を与えて下さい」と、パウロは祈った。これが第 1.

われわれは何十年教会に来ていても、ちっとも聖霊の力、内なる人が強くなっていない。われわれは未信者とちっとも変っていない。

## 『ロマ書の研究』に附する序 (1)

終わりに当たりまして、内村先生の有名な『ロマ書の研究』の序文をちょっと読んで終わりたいと思います。内村先生の『ロマ書の研究』、私はこの本は日本に残る、後世に残る書物と思います。

先生の「ロマ書の研究の序文」Dedication(献呈の辞)には、

「余と同時にキリストを信じ、一生涯を通じて信仰を共にしきたれる同好、同級、同窓の友なる北海道大学教授ドクトル宮部金吾君に、旧友の変わらざる愛をもってこの書を献ず。著者」と Deication がありまして、次に『ロマ書の研究』に附する序」。

「余に一生の志望があつた。それは日本全国に向かつてキリストの十字架の福音を説かんことであつた。この志望は、余が明治の 11 年、札幌において初めてキリストを信ぜしときに起こつたものである。爾来星霜 40 年、その実現の機会を待つも到らず、時にあるいは志望は夢として消ゆるのではあるまいかと思つた。

されども機会は遂に到来した。神は余のために所を備えたもうた。それは東京市の中央、内務省正門前、近くに宮城を千代田の丘に仰ぐところ、大日本私立衛生会の講堂であつた。余は此所に、大正 8 年 5 月より同 12 年 6 月まで、満 4 年にわたり、日曜日ごとに、聖書を講ずるの自由を許された。」

## 『ロマ書の研究』に附する序 (2)

建物はドイツ式の宏壮なる者、設備完全にして、震災以前の東京市において、他に得る能わざるものであった。聴衆はすべての階級を網羅し、キリスト教各派の信者、教会以外の信者、またみずから信者と称せざるもの、また仏教の僧侶さえもそのうちに見た。実に日本にキリスト教が伝えられて以来、いまだかつて見たことのない聴衆であったと思う。その熱心に至っては、彼らのうちに、あるいは宇都宮より、あるいは名古屋より、毎回列席せる者ありしに徴しても分かる。余自身にとりては、世の生涯の最高潮に達した時であって、59歳より63歳に至るまでの間、この楽しき事業に従事するを得て、感謝この上なしである。

余は大手町において、ダニエル書、ヨブ記、ロマ書、並びに共観福音書の一部を講じた。その内余が最も深く興味を感じしものはロマ書であった。使徒パウロによって口述せられしこの書はキリスト教の真髓を伝える書である。この書を解せずして、キリスト教を解することは出来ない。また余の47年間の信仰の生涯において、余が最も注意して研究したりと思うはこの書である。

### 『ロマ書の研究』に附する序 (3)

余はロマ書を講じて、実は予自身の信仰を語ったのである。ゆえに 60 回にわたりしこの講義は、余に取りて快樂の連続であった。これを百回または二百回となすも余は倦怠を覚えなかつたであろう。神の恩恵の福音の口述である。キリストに現れたる天父の愛の宣伝である。これに勝る<sup>たのしみ</sup>愉樂の他にありようはずはない。余は第 60 回の最後の講義を為し終わったときに、惜別の涙を禁じ得なかつた。

著者なる余自身が、この書の不完全を最も痛切に感ずる者である。余は編纂者と共に最善をつくしたつもりであるが、その結果たる、理想に遠く及ばざるを遺憾とする。「我らこの宝を<sup>うつわ</sup>瓦器に持てり」(コリント後書 4.7) とある如く、パウロの<sup>のこ</sup>遺せし本文は宝玉であるが、我らがこれに与えし註釋は土の器にすぎない。但し器は無きにまさるべし。あえてこれを世に提供するゆえんである。

余はここに、過去6年の間、余の講筵の席に連なり、直接間接にこの聖業に参加せられし多数の聴講者諸君に心よりの敬愛を表す。また藤井武君、黒崎幸吉君、時田大市君、畔上賢造君ら、余と講壇を共にせられし諸君に感謝す。またその音楽的天才をもって会衆一同を讚美の歌に導かれし故吉澤重夫君の好意を記念す。ことにまた聴衆の一人なる古賀貞周君が、本書出版の費用を負担せられしを感謝す。人生は短し、真理は長し、われら、この短き生涯に

おいて幾分なりとも神の福音の真理のために努力して、その永久性の分与にあずかりしことを感ぜざるを得ない。願わくは栄光限りなく聖霊により、イエス・キリストの御父なる真の神に帰せんことを。」

大正 13 年（1924 年）7 月 5 日 内村鑑三」

## 『ロマ書の研究』に附する序 (4)

先生のロマ書の序文の最後の部分に、「余はここに、過去 6 年の間余の講筵の座につらなり、直接に間接にこの聖業に参加せられし多数の聴講者諸君に心よりの敬愛を表す。また藤井武君、黒崎幸吉君、時田大一君、畔上賢造君等、余と講壇を共にせられし諸君に感謝す」とあります。

ここに鈴木秀夫君がご出席になって居られますが、この先生の最後の感謝の初めに、鈴木君や私ら、誠を取るに足らない、ふらふらしているいくら聴いても分からない人間、そういう聴講者をつかまえて…「余はここに、過去 6 年のあいだ余の講筵の席につらなり、直接に間接にこの聖業に参加せられし多数の聴講者諸君に、心よりの敬愛を表す」と。鈴木君や私ら、ふらふらしておりましたけれどその我々に対して内村先生は「敬愛を表す」。「敬愛」と言ったら、一番大きな言葉でしょう。

あとの「藤井武君、黒崎幸吉君、時田大一君、畔上賢藏君等、余と講壇を共にせられし」者に対して「諸君に感謝す」です。軽いですよ。自分の一の弟子と言われる藤井武、黒崎幸吉、畔上憲造という弟子には、君らは、私と講壇を共にした、ちょっと感謝してやろう。しかし鈴木君やわれわれみたいにふらふら聞いていた、そういう人間に対して、「敬愛を評す」。われわれは内村鑑三に敬愛を表されてきた。

それで信仰が分かった。パウロはエペソ教会のために、信者のために祈っ

たその祈りが受け入れられて現在に及んでいる。日本においては内村鑑三を出した。我々は伝道者の敬愛の心によって信仰を与えられている。